第１回 栃木県総合計画懇談会「人づくり部会」

会議結果の概要

平成 22 年 6 月 28 日

栃木県総合政策部総合政策課

○第１回栃木県総合計画懇談会「人づくり部会」の開催結果

１　日　時　　平成 22 年６月 28 日（月）14:00～15:45

２　場　所　　県庁本館 大会議室２

３　出席者　　藤井部会長、青木委員、上野委員、粉川委員、塩谷委員、當麻委員、中田委員

〔県〕総合政策部長、総合政策部次長、関係部局次長ほか

４　概　要

事務局から「人づくりの方向性」及び「次期総合計画における指標設定の基本的な考え方」について説明し、意見交換を行った。

【発言要旨】

(1) 人づくりの方向性について

〔部会長〕

ライフステージに沿って御意見をお願いしたい。

〔委員〕

「とちぎの未来を担い、今を支える、魅力と活力あふれる人づくり」という記載があるが、当り障りがない「魅力と活力あふれる」という表現が多いように感じる。市町の総合計画などにもこの言葉があふれている。時代もだんだん変革しているので、もうちょっと違う表現を考えてもいいのではないか。

佐野市で先週末に、市民活動をしている団体への助成審査会があった。参加された 14 団体 NPO 法人やボランティアの代表等の方々は、ほぼ全員がシルバー世代と子育て中のママさんであったが、元気がよく、地域の環境や教育を一生懸命盛り上げてくれている感じであった。魅力と活力は確かにあったが、例えば、もっとはっきりとした文言で、「強く優しい」とか。

まちづくりに関しては、まち全体を変えようなどと大それたことは考えていないが、自分でできることは必死になって、まちのためにやるのだという強い心がある。周りの人たちには、一所懸命支えよう、あるいは応援しよう、という優しさがある。福祉の部分や教育の場面、経済においても、今は強さがなければ自殺者が増えてしまう。優しくなければ福祉は完結できないことを考えると、はっきりと表現をしてしまうことも一つなのではないか。

それから、ここ３年、５年、10 年ぐらいが勝負だと思うが、地方分権・地域主権が進む中で、基礎自治体の死活問題は当然出てくると思う。そのときに、県民とか市民の根底にある気持ちは常に自主･自律であると、自分たちを自分たちが律しながら、自分たちができることは自分たちでやるのだ、という気持ちを常に持っている県民・市民がこれから必要なのではないか。

当たり前の言葉でいつもどこでも使うのだが、「One for all , All for one」で、一人はみんなのために、みんなは一人のためにやっていくことが、今の憂える社会の中では非常に重要である。

〔委員〕

ライフステージで、子ども、若者、大人、子育て世代は、それぞれ「はぐくむ」という言葉で結んであるが、シルバー世代に、はぐくむについて何も書かれていない。シルバー世代にも「はぐくむ」があっても良いのではないか。

〔委員〕

私もシルバー世代のところに「はぐくむ」がないのが気になった。シルバー世代の知恵と能力を活かすということであるが、加えて「生きがいを持って」という文言があっても良いのではないか。シルバー世代だけではなくて、大人世代にも加えた方が良い。

〔委員〕

「はぐくむ」「活かす」はそれぞれ非常に大切だということはよく分かるが、協働のまちづくりを含め、県の場合は、県民と協働でいろいろなものに取り組む人材を育てるという意味での「人づくり」だと思う。すべての県民が果たしてそういう意志を持って臨んでいるかどうかも、考えていかなければならない。いかに自らが進んでこういったものに携わろうという意志を持つかどうかも反映させる必要があると思う。

さらに、「挑戦する心をはぐくむ」という言葉も、他では余り目にしないような言葉で力強くて良いと思うが、「挑戦」という言葉に個人的に少し違和感があるので、検討願いたい。

〔委員〕

私は子育て世代だが、「子育て世代、子育て力をはぐくむ」というのは、「子育て」が重複していて工夫がない感じがする。「子育て力」は良い言葉だと思うが、何か別の言い方ができないか。「親力」は、よく生涯学習センターの親力アップセミナーなどにも使われているが、ちょっとぴんとこない。子育てというのは親も一緒に育っていくものであり、例えば、「子どもとともに育ち育てる力」といったように言いかえてみるのはどうか。ちょっと長いのでもう少し短くできないかとは思うが。一緒に親も子どもも育っていくもの、自分の子どもだけでなく地域の子ども、日本中のすべての子どもとともに大人が育って、一緒に育てていこうというようなニュアンスが入ると良いと思う。

また、「就学前教育の充実」は、子育てサロンなどで私も自分の子どもがお世話になってきたので分かるのだが、それに関わる親や子どもだけをターゲットにするのではなくて、例えば、子どもたちに歯磨きの習慣をつけようという話で、生まれたばかりの赤ちゃんには虫歯菌がないが、大人からの口うつしやスプーンを共有したりするとうつる。その話は、母親と子どもたちだけではなく、シルバー世代の人たちにも浸透させていかないと。お姑さんに、スプーンを使わないでとか、とり箸を使ってとはなかなか言えないというような現実的な問題もあるが・・・。せっかくなので、この場でお話しさせていただいた。

〔委員〕

それぞれのステージごとにおおむね理解ができる内容である。ただ、それを目指すための取組方向が重要になってくる。人づくりということで、非常に広い観点で様々なことを考えてしまうので、整

理するのが難しいが、皆さんの意見を聞きながら、一緒に整理をしていきたいと思っている。

先日、マツダの無差別殺傷事件があったが、どこのステージであのようになってしまうのか、環境なども含めて様々な要因があると思うが・・・、ステージごとにそういった重要な取組を検討し盛り込んでいけば良いのではないか。

〔部会長〕

枠組みに関して一通り意見を伺ったので、ライフステージごとに少し区切って話を進めていきたい。もちろんクロスオーバーしても結構である。

まず、確認したいのだが、子ども世代について、「成長の基礎をはぐくむ」と「人として生きる力をはぐくむ」に、私は個人的に「人として」はなくてもいいと思っているが・・・、２つに分けているということは、恐らく「生きる力」のほうは就学後、小学校以降ということになるのか。

〔総合政策部次長〕

就学以降のイメージである。

〔部会長〕

ということは、「成長の基礎」のほうは就学前ということになるのか。そのように分けることも含めて、ここにどんな内容を盛り込んでいけば良いか、意見をお願いしたい。

〔委員〕

子どもと若者と大人とシルバー世代、年代的にはどんな感じで分けて考えたら良いか。

〔総合政策部次長〕

クロスオーバーしている部分があると思うが、事務局としては、子ども世代は就学前から中学生まで、若者は高校生から社会的に自立するくらいまでの世代、65 歳以上をシルバー世代というイメージで考えている。

〔部会長〕

就学前の「成長の基礎をはぐくむ」ところは、重点戦略１「暮らしを支える安心戦略」のプロジェクト１「安心の子育て環境づくりプロジェクト」とかなりかぶる感じがする。プロジェクトは、実際に何かを行っていくということだと思うので、私たちのほうでは、こういう点が大事であるという視点を列挙するというイメージでよろしいか。

〔総合政策部次長〕

「人づくり」の部分では、あくまでも個人のパーソナリティ、社会性の形成等について、ライフステージごとに取り組むものを考えていただく、「安心戦略」では、子育て環境づくりのためにはどんな方策があるのか検討していただく、ということで考えていただきたい。

〔部会長〕

あくまでも個人ベースを考えれば良いということになるのか。

〔総合政策部次長〕

それと同時に、「人を活かす」という部分では、社会的な関わりを接点としてどう持っていくかという視点も当然議論の中に入ってくる。「人をはぐくむ」という部分は、人のパーソナリティや社会性の形成についてどのように取り組んでいくかということで、「人を活かす」では、社会とのつながりの部分で議論していただければと考えている。

〔委員〕

子ども世代のところで「成長の基礎をはぐくむ」というのは、そのとおりだと思うが、人を思いやる心をはぐくむのもこの時代ではないか。他人の痛みがわかる、人を思いやる心をはぐくむことも大切だと思うので、子ども世代か若者世代かのどちらかに入れられないだろうか。

〔委員〕

「とちぎ元気プラン」に「心の教育」というのがあるが、漠然としていて、心の教育とは一体どういうものなのかが分からない。「思いやる心をはぐくむ」というのもとても難しい。「心の教育」など「心」と言うと、文言的にはとても的を射た言い方になるが、私個人としては具体的に理解できない。

〔委員〕

子ども世代からそれぞれ意見を出していくわけだが、（事務局には）適したステージでその意見を拾い上げていただき、難しい部分は切り取りながら、やさしい形でまとめていただきたい。どう取り組むかという時に頓挫しないよう、現実的な部分で、子どもは端的に子どもの部分、若者は若者、大人は大人、シルバー世代はシルバー世代という形に記載し、最終的にそれを一連でまとめていってもらえれば良いのではないか。

子ども世代であるが、私がここ 10 年くらいＰＴＡ活動をやってきた中で、怖い状況になってきているのは、中学生以下で、万引きしたり相手をひっぱたいたりなどの悪さをする者がいなくなってきたことだ。みんな良い子になってきてしまったということである。

良い子になっているストレスをどこに持っていくかというと、アンケートをとった結果だが、ゲームやインターネットである。全国的にも携帯電話を持たせたくないということになってきているが、携帯電話の出会い系サイトで、栃木県内の子どもが連れ去られ、県外で見つかるというようなことも多い。ストレスが爆発して、学校の窓ガラスを夜中に割ったり、親に対しての暴力になったり・・・。そのような家庭に行くと、親力が全然ない、今、家庭の問題が大きくなってきている。

具体的な話をすると、小学校のモンスターペアレントがここ５年くらい増えてきている。小学校予備軍の幼稚園でも、今、先生たちが必死になって面倒を見ているのは、子どもではなくて親である。幼稚園で何とか親の教育をして小学校に上げて、小学校の低学年の先生たちも苦労をして、ようやく３年や４年になってモンスターが少なくなってくる状況である。親力の欠如が非常に顕著なので、子ども世代では、特に家庭教育力や家庭教育力をサポートしていく地域教育力に焦点を当て、できるだけみんなで育てていこうという形をとっていかないと。面で育てていくような施策が必要になってきているのではないかと感じている。

〔委員〕

更生保護活動にも従事し、特に青少年に多く携わっているが、家庭内の教育が原点にあることは否定できない。中学生から高校生の中退が多いが、それが社会人になっても影響が出てくる。若年層の罪の意識が少ない犯罪も非常に多く、原点は、家庭内の生活だと思う。食事すら作らない家庭や、親が未成年の子どもと一緒にパチンコに行くなどは珍しくない。中学校でも、モンスターペアレントのお子さんが一番暴れん坊になっている。そういう姿を見てくださいといっても、見に来るのは常識的な保護者で、見に来て欲しい保護者は来ない。社会のいろいろな問題の元凶は家庭内にあると思う。

また、モラルハザードも含めて、地域の道徳観が欠如している。例えば、中学生が自転車で登校するときはヘルメットをかぶるが、大人はかぶらない。高校生になったらかぶる必要がない。これでは、中学生に、なぜヘルメットをかぶらなければいけないかという説明もできない。大人が、家からヘルメットをかぶって出ない子どもを目の当たりにしても注意できない。大人も社会の中で、ごみ捨てを含めて、いろいろとルールを守っていない。そういう姿を見て、果たして子どもたちがルールを学んでちゃんと育つかというと、非常に難しい状況である。

「人づくり」を考える上で、どういう人を目標にしたら良いか、自分なりに考えてみた。市町村や自分の住む地域も含め、積極的にいろいろなものを学び育ち、人と協力しながら生活していく県民になるのが目標の姿なのではないだろうか。そういう目標とすべき姿を目指した「人づくり」をしていくにはどうしたらいいのかを考えながら、自由に意見を述べたので、うまくまとめていただければと思う。

〔部会長〕

本日は、言いっ放しで結構なので、たくさん意見をいただければと思う。

子ども世代について、家庭の問題が大切だという意見は本当にそのとおりだと思うが、事務局としては、親の話は子育て世代のところに書くという考えか。

〔総合政策部次長〕

子育てに関しては、子育て世代の「子育て力をはぐくむ」における取組をメインに考えているが、必ずしもうまく当てはまるものばかりとは限らないので、他の部分への記載も出てくるとは考えている。

〔委員〕

子育てというのはすべての世代の大人が関わっていくものであって欲しい。「点」で子育てをというのではなくて、「面」で子育てをという観点で検討いただければと思う。

〔部会長〕

学齢児童生徒の家庭環境に基づく様々な問題については、各学校でかなり努力されて、ご飯を一緒に食べるなど、家庭教育力アップへの働きかけはなされていると思う。ただ、本当に問題を抱えているところには手が届かない。学校の先生ですらなかなかというところがある。その辺の意識を向上さ

せるのは大変難しいと思う。書くことは簡単だが、指摘があったように、家庭だけ、学校だけでは無理なので、子育て支援も同じだと思うが、第３の手というか、地域の人やシルバー世代の方にも一緒に知恵を出してもらって、新しい何かを生み出すという発想もあってもいいのではないかという気がする。こういう書き方自体がそれを阻んでしまうのかという気も少しする。

〔委員〕

小学校・中学校の学習指導要領は 23 年に変わることになっているが、ゆとり教育について先行して変えていると聞いたが。

〔学校教育課長〕

学習の内容そのものは 23 年から変えるが、特別活動とか総合的な学習の時間については、既に変えて行っている。

〔委員〕

心をはぐくむとか人を思いやる心というのは、もちろん家庭や地域でやっていくことなのだろうが、現実には、学校での集団生活や友人関係の中ではぐくむものがたくさんある。今までは社会教育主事が地域の教育事務所を通して、いろいろな体験学習をさせながら、地域の人たちと小学生・中学生を交流させるようなゆとりの部分があった。今は全然なくなってしまったというわけではないにしても、勉強が忙しくなり、部活もやる暇があるかどうか。そういう中で、家庭では親が忙しい、地域とは乖離している、学校は勉強第一という状況になってくると、人を思いやる心という教育は一層できなくなってくる可能性がある。どこかにはっきりと入れていかないと・・・。スポーツも満足にできない、勉強だけできればいい、という状況にならないように、計画の中には、こういうところでこういうことをやる、と具体的に書いていった方が良いと思う。

〔部会長〕

文部科学省関係では、学校を拠点とした地域教育推進本部をつくり、親も地域の人も巻き込んで、一緒に子どもを育て、自分たちも育つという事業がある。例えば、その栃木県版のようなものをつくってみてはどうか。本日のキーワードとなっている「面」ということを検討いただきたい。

次に、若者世代について、高校生から自立するまで、就職するまでというあたりの年齢層について、意見をお願いしたい。

〔委員〕

先ほど犯罪が少なくなっているという意見もあったが、少し疑問を感じる。私はシルバー世代に足を突っ込んだ世代であるが、自分たちが産んだ子どもたちがまた子どもを産む年代になった。我々の世代は結構責任を感じているというか、シルバー世代は何が悪かったのだろうと話すことも多い。シルバー大学校で学んだ方などは各地域で頑張っているが、まだ力があり余っていると思うので、大いに活用していただきたい。

若者世代については、私は性善説の考えで、子どもの問題は大人に責任があると思っている。良い

面を持って生まれてくるが、環境などで悪の道へ進むことが多いのではないだろうか。

〔委員〕

若者世代は、思春期で難しい年ごろなので、照れくささが先に立ち、地域の行事等に関われないということがある。私はＰＴＡ活動で地域の皆様の協力をいただき、いろいろな取組をしてきたが、我々よりも若い世代の保護者は、どうも恥ずかしくて、地域のことを自ら手伝うということは難しいようである。若者世代から、帰属意識というか郷土愛というか、地域の一員であるという気持ちをうまくはぐくむことができれば、大人になり、子育て世代からシルバー世代になっても、地域に関することに取り組みやすいのではないか。その辺のところをうまく織り込んでもらえればと思う。

〔部会長〕

この世代は将来の職業選択の年代に入ってくるが、そのあたりの意見もお願いしたい。

冒頭に、自主自律、自ら進んで意思を持って、という意見をいただいた。今の若者には、このあたりが非常に欠けているのではないかと、日ごろ学生と接して感じている。言われたことは本当にきちんとやるが、人と違うことを自分で考えてやるということがない。非常におとなしい。次の世代に「挑戦する心」とあるが、大人になって急に挑戦といっても難しいので、その前の世代で、たくましさや自主自律の精神みたいなものをはぐくむことも大切ではないか。

〔委員〕

この辺の若者はどうしても東京に出て行ってしまう。ある会議で、関所をつくったらどうだ、１回入れたら外に出さないという政策があると良いというような話が出たくらい、みんな東京に出ていってしまう。就職場所がないこともちろんあるのだろうが・・・。しかし、実は、他県から来る若者も多く、最近の話で、神奈川県在住の方であったが、栃木に１回来てみてとても良かったので、引っ越してきたという人もいた。若い世代の段階で良さを見せることも大切だと思う。

もう一つは、大人世代の話になるのかもしれないが、我々が生きるのが精いっぱいな状況なので、若者が我々を見て夢を感じない。大人に覇気がないということで、責任ある職業には絶対につきたくないというのが、今朝の日経新聞のアンケートの第１位となっていた。例えば、農業はおもしろいぞ、農家に生まれてラッキーだというように、我々大人が若者に発信できるものがあればと思う。

〔部会長〕

「面」という言葉が出たが、みんなで育てて育ち合うということで、中を貫くのは例えば自主自立や思いやる心みたいなもので、みんながそれを意識し分かち合いながら共生していく。この関係を直線ではなくて、何か円のような図にできないだろうか。そうすれば、子育て世代と子どものところがうまくリンクできる絵が描けるのではないか。

大人世代についてはいかがか。

〔委員〕

確か、2001 年に下野新聞に投稿した際、「個と公の調和」という考え方について書いたことがある。

例えば、自分さえ良ければ他はどうでもいい、給食費なんか払わないやつはいっぱいいるだろうという自分勝手な人のことを「私」と表現するとすれば、自分の責任をしっかりと持ちながら、自分のやるべきことをしっかりと積極的にやり、そこにはちゃんと自己責任があるというのを「個」と表現する。２人以上が「公」となる。家庭から、市町とか、県とか、国に、自己責任のある「個」の一人ひとりが、今後、公の中でその調和をはぐくんでいくというコミュニティをつくっていかないと、地域はどんどん悪くなっていってしまう。

「個と公の調和」という考え方は、一番最初に日本青年会議所で出したものだが、宇都宮大学の津布楽名誉教授が絶賛され、県内にも広めていく必要があるということで、ＪＣ（青年会議所）を中心に 10 年活動してきた。この考え方は永遠のテーマになるかもしれないと思っているが、特に焦点になるのは大人世代である。シルバー世代がせっかく「個と公の調和」をつくってくれても、大人が壊して子どもに伝えている。「個と公の調和」とか「コミュニティの再生」が真ん中の核にきて、子どもとか若者が周りで調和していくということだろう。

私は、シルバー世代がすべての軸になってくれるとありがたいと思う。責任感があって、絶対に投げ出さず、信用できる。だから、もっとシルバー世代にいろいろな分野のリーダー的な存在になってもらいたい。

〔部会長〕

社会との関わりということも打ち出していく必要があると思う。例えば、若者世代では、責任ある大人になる準備をする、社会に貢献する、社会づくりに参画するなど。「責任」ということがどこかにないと。

〔委員〕

大人が挑戦する心をはぐくむ以前に、時間がないというか、皆さん忙しくてそこまで余裕がないということがある。子育て世代もそうだと思う。そこで、やはりシルバー世代に登場していただき、力を借りるというか。その辺も踏まえて、直線のライフステージではなく、形を変えていただくともう少しわかりやすいと思う。

〔委員〕

先月、釜川コケ落としというボランティア活動に参加した。６歳と５歳の娘たちは、コケ落としそのものの役には立たなかったが、私は小さいころからボランティア活動に参加していたと、いつか分かるときがくると思っている。宇都宮市民活動サポートセンターがやっている活動だったが、そういったチャンスがあるのはとてもいいことだ。

中・高校生は、ボランティアをやりましょうといっても、なかなか恥ずかしくてできないと思うが、いつの間にかそういう活動に加わっていた、こういうものもボランティアだったのだ、というものがあると、郷土愛や帰属意識につながっていくし、そういう活動をしている大人たちの姿を見ることで、いつか（ボランティア活動に）戻ってきてくれることもあるかと思う。

大人たちがこの栃木県が大好きで、こんなに住みやすくてすばらしいところなのだという発信をしていない。計画の中に栃木県に誇りを持てるような何かを盛り込んでいただきたい。

若者世代では、例えば、自らの可能性だけではなく、「自らの可能性と夢をはぐくむ」とか、もうちょっと夢を持てるようなものを盛り込んでいただきたい。大人世代であれば、挑戦するというだけでは個人的なことになってしまうので、先ほどの意見にあった「個と公の調和」というのはとても重要なキーワードだと思う。

〔委員〕

宇都宮おもちゃの図書館というのを昭和 59 年に立ち上げ、30 年近くになる。中・高校生がボランティアで来ていて、そのつき合いがずっと続き、子育て世代になり、今では子どもを連れておもちゃの図書館に来てくれている。その一方では、この 10 年くらい、中・高校生との関わりが途絶えている。

〔部会長〕

中・高校生のボランティアというのは、時間もなくて活動しにくいのかなという気もするが、そこを地域で盛り上げていくという方向性だろうか。

「人を活かす」については、シルバー世代の知恵と能力を活かしてもっと活躍していただきたいという意見が共通であった。「みんなで育て育ち合う」、「活かす」あたりの書き方を工夫されるよう、事務局にお願いしたい。

〔委員〕

下段に「文化・スポーツによる健全な心身の形成や世代間交流の促進」と記載されているが、突然過ぎると思う。こういう視点もあったほうがいいということで、参考までに書かれているのかなとも思ったが・・・。

〔総合政策部次長〕

人づくりにおいて、文化・スポーツは各世代を通じて広がりを持っている、そういう視点から、文化・スポーツによる健全な精神の形成や世代間の交流促進ということで特出しで記載させていただいている。

〔部会長〕

中に入れ込んでしまうという手もあるか・・・。

〔委員〕

世代間交流の中にスポーツとかボランティア、コミュニティ活動がくくられるかと、あえて別出しすると唐突な感じがするので、くくれればいいかと思う。

〔部会長〕

委員の意見等も踏まえ、事務局で検討願いたい。

(2) 次期総合計画における指標設定の基本的な考え方について

〔部会長〕

確認だが、人づくりの成果指標は、ライフステージごとにということであるが、それぞれ幾つずつ設定する考えか。

〔総合政策部次長〕

現計画では、施策ごとに３つの成果指標を設定しているが、指標設定については、簡単に成果を表せるものと、なかなか難しいものがある。次期計画では、数にはこだわらず、適切な指標を設定していくという方向で考えている。

〔委員〕

参考資料として「とちぎ元気プラン」の指標一覧が配付されているが、県はさすがにすごいと思った。市町村でも総合計画の評価の仕方がよく分かっているところと、分かっていないところがあるようだ。これは分かりやすい指標だと思うので、ぜひ市町村にも教えてあげて欲しい。

ただ、これはやめてもらいたいと思うのは、314「活力ある林業・木材産業の振興」の「森林組合作業員の平均年齢」である。森林はこれから一つの新しい産業になってくるからこそ平均年齢を下げて若い人たちを入れていこうという意気込みなのであろうが、「人づくり」の「シルバー世代の元気な活力をもっと活用しましょう」という考え方があるとすれば、こうした年齢の目標を設定すること自体、どうなのだろうか。年齢で人をはかる、施策をはかるのは、いいことと悪いことがあるかもしれない。私は得てして悪いことのほうが今の時代では多いと思うので、ぜひ、人づくり部会では年齢を基準にした指標を入れないようにして欲しい。

〔部会長〕

数値目標には、非常に客観的で妥当性があるものと、そうでないものがあり、確かに難しい。その意味でいうと、先ほどの文化・スポーツについては、「とちぎ元気プラン」の施策 121「生涯学習の推進」、122「県民文化の振興」、123「県民総スポーツの推進」の成果指標を見ると、かなり客観的な数値で示しやすい。そういうことで、文化・スポーツが特出しになっていたのだろうか。心の問題とか家庭教育の充実というのをはかるのは非常に難しいと思う。

〔委員〕

指標設定の基本的な考え方はこれでよろしいと思う。具体的な指標については、次回、事務局案を示していただいた時に、改めて意見を申し上げたい。

〔部会長〕

教育委員会に質問だが、施策 111「授業がわかる児童生徒の割合」は、全県のすべての小・中学校にアンケートをとったものか。

〔教育次長〕

抽出である。

〔部会長〕

アウトカム指標が一番重要だということであるが、県民にどういう効果や成果があったかをはかるためには、数値で表されないものについては満足度調査が必要になってくると思うが。

〔総合政策部次長〕

現計画においても、毎年、総合計画の施策に関する県民満足度調査を実施しており、指標だけではなく、満足度評価も含めて総合的な評価をしているところである。

〔部会長〕

データについては、各部局の既存のものからピックアップするという考え方なのか。それとも、新たに何かを起こすということもあるのか。例えば、「思いやりの心を育てる」を成果指標に挙げたいとすると、「思いやりの心がどれだけ子どもたちに育ったか」を調べる、目標値を設定するなど、新たに仕事が発生することになると思うが、そういうこともあり得るのか。

〔総合政策部次長〕

人づくりの指標設定については、個別の施策について目標値を設定するということではなく、基本的に、ライフステージごとに設定していきたいと考えている。指標については、分かりやすく、技術的にもそれほど難しくないものを検討して参りたい。

〔部会長〕

事務局には、本日の議論を十分に踏まえた検討をお願いする。

5　その他

・　第２回部会の開催予定　９月 10 日（金）15:00～　　本館６階大会議室２